

「ウクライナの歌姫 ナターシャ・グジーコンサート ～バンドゥーラにのせて伝えるいのちと平和～」事業

水晶のような歌声とバンドゥーラの響きにのせて チェルノブイリの被爆体験と命や平和の尊さを語る

地方都市において子どもたちが海外の文化や芸術に触れる機会は少ない。その機会を提供するため、こどもステーション山口が企画したコンサートには、多くの老若男女が詰めかけた。幼年期に原発事故による被爆体験を持つウクライナ出身の歌姫が歌い、奏で、語るコンサートで、参加者は命と平和の尊さについての思いを新たにされた。

子どもたちと一緒に平和・命・人権について 考える事業の一環として実施されたコンサート

「ウクライナの歌姫」と称され、民族楽器バンドゥーラの演奏家でもあるナターシャ・グジーさん。彼女が6歳の1986年4月、父親が勤務していたチェルノブイリ原子力発電所で爆発事故が起こり、原発から3.5kmの場所で被爆した。各地を転々としながら避難生活を送った後、キエフ市に移住し、8歳の頃から音楽学校で歌や楽器を学んだ。彼女は2000年から日本で暮らし、アーティスト活動を行っている。

2013年8月23日、山口県教育会館ホールで、「バンドゥーラにのせて伝えるいのちと平和」と銘打たれた彼女のコンサートが開かれた。主催は認定NPO法人こどもステーション山口で、実施にあたってAJOSCと山口県遊技業協同組合からの助成が活用された。

「今回のナターシャさんのコンサートは、主に小学校高

学年以上の子どもたちを対象に毎年、夏に開催している『8月のLove&Peace』事業の一環として企画されたもので、これは一年に一度、子どもたちと一緒に平和・命・人権について考えようという趣旨で行っているものです。透き通るような歌声とすばらしい演奏の合間に、チェルノブイリ原発事故の体験や故郷への思いについて静かに語る彼女のコンサートは、まさにその趣旨にピッタリでした。参加した約280名へのアンケートでも、歌や演奏に感動したという声とともに、平和や家族やふるさとの大切さ、原発事故がもたらす悲しみなどについて思いを新たにされたという声が多く寄せられました」

そう話すのは、こどもステーション山口で理事を務める蔵重千恵子さん。「ナターシャさん自身、子どもをメインの対象にしたコンサートはこれまでほとんど経験がないということで、新鮮な体験ができたとおっしゃっていました」と、蔵重さんは語る。

また、コンサート当日、ホールのロビーでNPO法人3.11こども文庫を通じてお借りした福島県の子どもの絵を展示する「ふくしまそうまの子どものえがきたいせつな絵展」を同時開催した。「昨年、大々的な展覧会を行いました。距離は離れていても福島のことを忘れていませんという気持ちを表わすため、今回は約30点ほどを展示しました。参加者もナターシャさんも熱心に見ていただきました」と、蔵重さんは話す。



水晶のような歌声で会場を魅了したナターシャさん



コンサート会場のロビーに福島県の子どもの絵が展示された



コンサートの告知チラシの制作にもAJOSCと山口県遊協の助成が活用された。コンサート当日の様子は地元新聞にも大きく報道された

「わたしの子どもから、わたしたちの子どもへ」を理念に 活動を続けるこどもステーション山口

こどもステーション山口は、27年間にわたって「ゆたかな子ども時代」を実現するために活動を続けてきた山口おこ劇場を前身として、2000年に設立された団体。翌年2月にはNPO法人の認証を受け、さらに2013年には山口県より認定特定非営利活動法人の認定を受けた。「わたしの子どもから、わたしたちの子どもへ」を理念に、地域社会全体で子育てを担うことを目的に活動を行っている。活動の柱となっているのは、青少年育成（こどもキャンプ、こどもまつり、こどもステージ・リ・フリー、8月のLove&Peace）、舞台鑑賞（年間約12作品、17ステージ）、子育て支援（保育スタッフ派遣、幼児の遊びのクラブ）、文化（あっちこっちdeアート、文化講演会）、指定管理（クリエイティブスペース赤れんが管理運営）の5事業である。

現在、地元の山口市を中心に、正会員約250名、準会員約75名が所属し、約500名の子どもたちが登録している。ここでの正会員とは、大人を指す。大人が会費を支払うことで、自分の子どもや孫に限らず、知り合いや近所の子どもたちも登録することができる。そのため、「異年齢の

担当者より



贈呈式に出席して
大変、感動しました。

認定NPO法人
こどもステーション山口
理事
蔵重千恵子さん

今回はAJOSCならびに山口県遊技業協同組合から共同助成をいただき、ありがとうございます。コンサートの広報・宣伝活動を充実させることができたうえ、福島の子どもの絵も展示することができました。贈呈式では、遊技業界の方々さまざまな社会貢献活動をしていることを知り、感動しました。

子どもたちはもちろん、さまざまな背景を持つ大人たちも集うことができ、それが一緒になって催事やイベントに参加することで、時間や空間を共有できます。それが良好な親子関係や仲間作りのきっかけになります」と、事務局長の内田奈保子さんは話す。なかには、母親や祖母から引き続き参加している2代目、3代目の子どもたちもいるという。

子どもの絶対数が減ってきているなかで、いま一番感じていることは、「塾や習い事、部活動などで子どもたちが忙しすぎる。しかも、それが低年齢化してきている」と、内田さん。そんななかで、子どものうちから生の芸術に触れる機会を増やしたり、他者と出会う経験を積み重ねることは、心身の健全な発達にとって重要なことである。今後も、これまでの活動を中心に事業を継続していくのはもちろん、さらに、「子どものネット依存の問題などにも取り組んでいきたい」と、蔵重さんと内田さんは抱負を語った。

山口県遊技業協同組合から

これまでも県遊協として青少年育成や更生保護のために支援・寄付を行ってききましたが、今回、山口の子どものために長く活動をしているこどもステーション山口が主催するコンサートに助成でき、活動の幅を広げることができました。